蔦重・馬琴・写楽・越谷新聞

令和7年2月20日・第2号・「真・写楽」発見号・旧日光街道・越ケ谷宿を考える会・発行

真・写楽はこうして見つかった

写楽は、世界でも誰も描けない肖像画140枚を10ヵ月で描いていなくなってしまった～

○写楽は、突然いなくなってしまった

誰も思いつかなかった。たぶん、ピカソでさえも思いつかなかった、あの肖像画を140枚、10ヵ月で描いて、写楽はいなくなってしまいました。個人的な知合いも少なかったようで、キイパーソンの蔦重が2年後に脚気で急死したことも輪をかけて、「写楽とは誰か」が分からなくなってしまったのです。

○それが写楽探索劇の幕開け　美術ファンが増え、出版も多くなり、昭和43年、写楽は誰か～という説が5本（「写楽」中野三敏著から）も出た年もありましたが、ほとんどは写楽の絵に似たものを描いたという根拠の説で、究極に迫る説ではなく、次に、文献から写楽を追う動きが出てきたのです。

さて、そのあと、「写楽追跡劇」はどのように進んだのでしょうか。①

貴重資料

写楽過去帳発見に至る記

文・写楽の会理事　花岡徹

平成8（1996）年10月の末、私たち写楽の会研究班が徳島県立図書館で、写楽に関する資料を探していた時のことであった。

「その本ならここにありますよ」

と、突然ぶっきら棒に声を掛けてきたのが柳生幸治君だった。彼は、覚束ない様子で資料を探す私たちの会話を小耳に挟み、ちょっと助けてやろうと思ったようだ。

図書館での資料探しから2週間ほど過ぎた頃だったろうか、彼が写楽の会主催の江戸学講座の会場にやってきた。

講座の受付をしていた私に、こんな資料が見つかった、と能楽資料集成『萬聞書』という本のことを話し始めた。その本は、江戸時代の能楽のさまざまなことを記した本で、その中に写楽である斎藤十郎兵衛の、何代か前の十郎兵衛に関する記述が有るというのだ。

能楽の大好きな5代将軍徳川綱吉が、能楽を常に楽しめるよう、多数の能役者を土圭之間番という名目で御家人として召し抱えた。土圭之間番とは、江戸城の時計の見張り番のことで、斎藤十郎兵衛こと半九郎もその中の一人だったというのだ。

これはすごい資料が出てきたと私は思った。早く写楽の会で発表しようかとも思ったが、待てよと思い直し、写楽の会会報紙には、

「写楽関係の新資料発見。別名も付記されているので、その名前で他の資料を探ってゆけば、別の新発見につながるかも知れない。詳細の発表はもう少しお待ちください」

とだけ書いて、彼の研究を見守ることにした。

年も明け、だいぶ経った頃、再び彼が江戸学講座に現れた。何かイライラした様子で、「探せって言ってもねえ、そんなに簡単には見つかりませんよ」と少し怒った風である。

私は彼にせっつくことなど一切しなかったのだが、自分自身をかなり追い詰めてしまっているようだった。

私は、もう彼だけでは限界だと判断し、悪いなと思いながら、写楽の会研究班の高瀬会員に詳細を話し、資料探しをするよう頼んだ。しかし1週間もすると、高瀬会員は音をあげてしまった。

それではと、今度は彼を交え、写楽の会研究班長である一山会員はじめ研究班全員で県立図書館へ資料探しに行くことにした。平成9（1997）年5月17日のことである。

最初に彼から、およその新発見の資料の説明をしてもらった。その時、私はふと（この御家人となった斎藤家の菩提寺に関する資料は無いのだろうか）と思いつき、尋ねた。彼は、はっと表情を変え、

「御家人だから、もしかしたら『寛政重修諸家譜』に載っているかも知れない」

と、その本がある書棚へ飛んでいった。

しばらくすると彼が、重そうな本を抱えて、私たちのいるテーブルに戻ってきた。

「有りました、ここに」

とページを開き指差した。

【築地本願寺法光寺】

それは何十年も警察が探し続けている指名手配犯の名前が、

入門ガイド「写楽」　NPO法人　写楽の会　2019.7刊　から～

電話帳に載っていたのと同じぐらいの盲点で、とても大きな驚きだった。

「それじゃあ、写楽の墓や過去帳が見つかるかも知れない」

と言う私に、彼は

「江戸の街は火事がしょっちゅう有ったから、期待できないなあ」

と言うのを、一山会員が、

「いやいや、調べてみる価値は十分ある。花岡君、この築地本願寺法光寺へ問い合わせてみたら？」

と後押しをしてくれた。

翌週月曜日、写楽の会事務局でもあった私の事務所の電話を取り、電話番号案内にかけた。

「東京都中央区には法光寺でのお届けはありません」

という返事に、やはり彼が言ったように、既に廃寺になってしまったのかと落胆したが、待てよ、築地本願寺なら何か知っているかも知れないと、築地本願寺に電話をかけてみた。

事務員らしき女性が電話に出た。彼女は、法光寺は数年前に埼玉県越谷市へ移転したと言い、法光寺の現住所と電話番号を教えてくれた。

（やった！）と心の中で叫んだ。焦る私はお礼もそこそこに電話を切り、早速、埼玉県に移転した法光寺に電話をかけた。

電話には樋口円准住職が出られた。私は、謎の絵師写楽が斎藤十郎兵衛であること、その斎藤十郎兵衛の一族の菩提寺が法光寺であったことが判明したことなどを説明し、江戸時代の過去帳が残っていないか聞いた。

すると、ご住職は過去帳なら残っていると言う。

私は、

「斎藤一族の中で、文化もしくは文政頃に亡くなった十郎兵衛の名があれば、それが写楽です」

と話すと、ご住職は、

「それが本当であれば、私たちにとっても栄誉なことです。調べてみますから2、3日、時間をください」

と、ありがたく承諾してくれた。

4日後の金曜日、私は気もそぞろに電話をかけた。電話に出られたのはご住職の奥様だった。

「主人は先ほど、写楽のことを調べてくると言って、本屋へ出かけました」

と言う。それを聞いて私は、ご住職は過去帳の中から斎藤十郎兵衛の記載を見つけたに違いないと確信した。私は胸が熱くなるのを覚えた。

私が何か聞こうとすると、奥様は今にも笑い出しそうな明るい声で

「私からでなく、直接主人から聞いてください」

と逃げられてしまった。

私は電話を切り、早く皆に知らせなければと思ったが、翌5月24日土曜日はちょうど写楽の会の総会の日だ。そこで皆に発表しよう。いやいや、それじゃあ、いっそのこと、ご住職に電話をするのは明日まで待って、皆と喜びを共にしようと決めた。

このようにして、平成9年度写楽の会総会での写楽の過去帳の存在の確認。6月1日、埼玉県越谷市法光寺での、写楽の過去帳発見に至ったのである。

埼玉県越谷市にある、浄土真宗　本願寺派のお寺、法光寺。＊本誌 P.30 に説明あり。

写楽の正体とは？

わずか十カ月で消えた謎の天才絵師その正体をめぐって議論沸騰！

写楽研究略史

東洲斎写楽は、江戸時代の１７９４（寛政６）年５月（同年11月に閏月あり）～１７９５（寛政７）年正月までの間に、１４０点余りの役者絵と、少数の相撲絵・追善絵などを描き残して忽然と消え、版元の蔦屋重三郎は写楽について何も明かさなかったため、「謎の浮世絵師」とされてきました。

写楽の評価が高まるにつれて、後年になって正体探しが始まり、次第に過熱していきます。

写楽が姿を消して約50年後の１８８４（天保15）年に江戸時代の考証家・斎藤月岑が書いた『増補　浮世絵類考』には「写楽　阿波侯の能役者　斎藤十郎兵衛」と記載されています。が、大正時代から異説が唱えられるようになり、１９２０（大正９）年に浮世絵研究家の仲田勝之助は阿波侯の能役者・春藤又左衛門説を発表（徳島市の東光寺に又左衛門の過去帳あり）。１９２５（大正14）年には徳島出身の人類学者・鳥居龍蔵が阿波侯の能役者・春藤次左衛門説を主張し、１９３０（昭和５）年には英文学者の野口米次郎がアマチュア絵師説を出して、その後も数多くの別人説が沸き起こっていきました。

昭和30年代になると、阿波能役者説を裏付ける史料が希薄なために一段と写楽別人説が続々登場し、各界の著名人があれこれと推理したのでマスコミに取り上げられ、写楽の謎解きが広く世間で盛り上がりました。

写楽の正体をめぐるおもな諸説について

写楽別人説について、美術史家で元国際浮世絵学会会長を務めた山口桂三郎氏は著書『写楽の全貌』（東京書籍刊）の中で、次頁の図のように一覧をまとめています。おもな「別人」を列挙すると次のようになります。（カッコ内は生年から没年）

●**阿波侯お抱えの能役者説**

斎藤十郎兵衛（1761～1820）

春藤又左衛門（?～1844）

春藤次左衛門（?）

●**浮世絵師説**

歌川豊国（1769～1825）

喜多川歌麿（1753頃～1806）

葛飾北斎（1760?～1849）

鳥居清政（鳥居清長の息子、1776～1817）

●**版元説**

蔦屋重三郎（1750～1797）

●**戯作者説**

山東京伝（1761～1816）

十返舎一九（1765～1831）

●**絵師説**

円山応挙（1733～1795）

谷文晁（1763～1841）

酒井抱一（1761～1829）

司馬江漢［二世鈴木春信］（1747～1818）

●**俳人説**

谷素外（1717～1809）

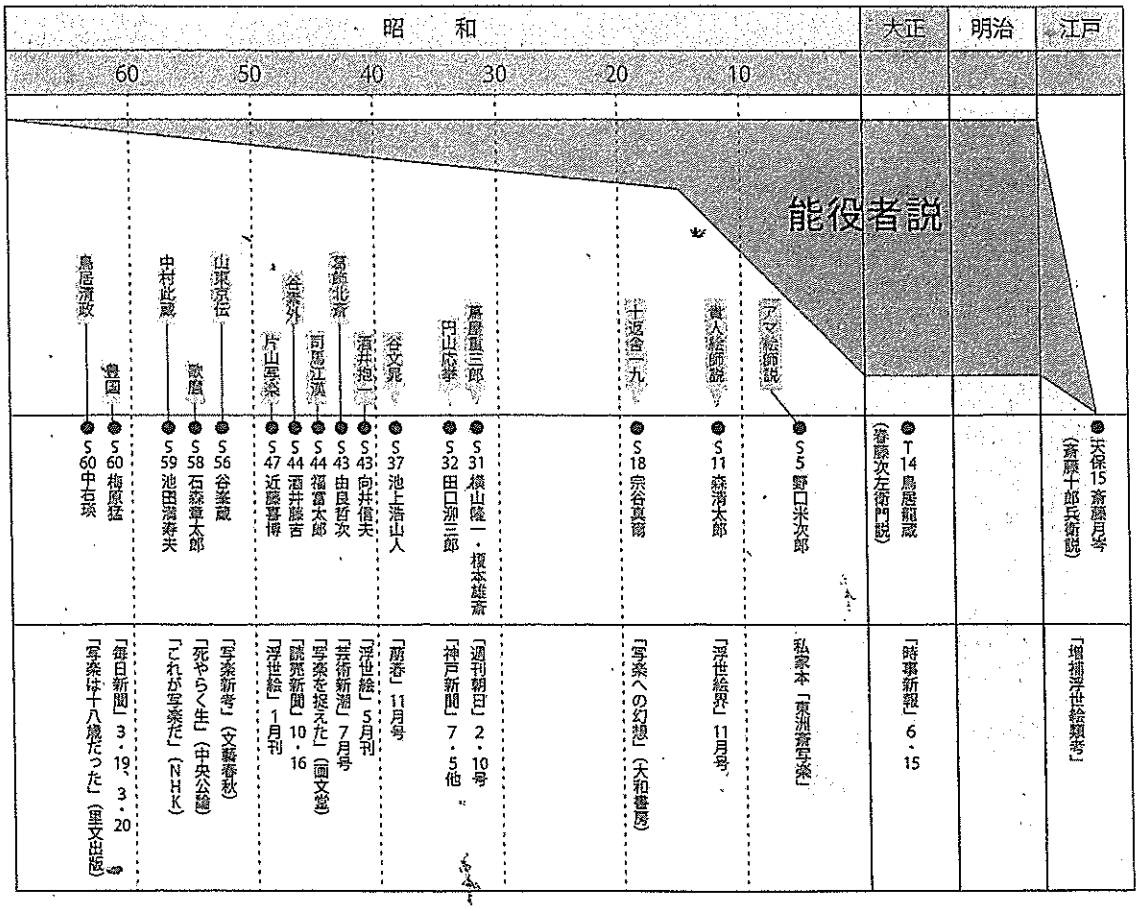
●**歌舞伎役者説**

中村此蔵（?）

ドイツの浮世絵研究家ユリウス・クルトは1910（明治43）年に刊行した評伝『SHARAKU』の中で、「写楽は阿波侯の能役者、斎藤十郎兵衛」と書いています。また、徳島県出身の藍研究家・後藤捷一氏が1956（昭和31）年に蜂須賀家の古文書『御両国無足以下分限帳』の中に「斎藤与右衛門」「斎藤十郎兵衛」の名を発見。1977（昭和52）年には九州大学教授の中野三敏氏が古文書『諸家人名江戸方角分』に八丁堀地蔵橋住の写楽斎という浮世絵師の名があったと発表しています。

浮世絵研究家の内田千鶴子氏は1981（昭和56）年に幕府公式の能役者名簿『重修猿楽伝記』『猿楽分限帳』という2種類の古文書に斎藤十郎兵衛、斎藤与右衛門の名を確認し、1761年生まれの十郎兵衛は写楽作画期の寛政6年に33歳であったことを割り出しています。

これらの研究に従って、私たち「NPO法人 写楽の会」も「写楽は阿波侯の能役者、斎藤十郎兵衛」説を提唱しています。



写楽別人説一覧（山口桂三郎編著『写楽の全貌』東京書籍刊より）

写楽豆知識●斎藤与右衛門の隣家に国学者村田春海が住んでおり、春海の養女は斎藤家の男児を養子にしている。

写楽再考

NPO法人写楽の会副会長　丁山俊彦・解説

『浮世絵類考』の「写楽」の項に、東洲斎という画号を持ち「阿波侯の能役者也」と書き記したのは、1844(弘化元)年の斎藤月岑『増補浮世絵類考』である。それまでの類考において、写楽の項に斎藤十郎兵衛の名があるものはないが、唯一、朱書きによる重大な書き込みのある「類考」がある。1827(文政10)年の達磨屋伍一本といわれる写本だ。「写楽ハ阿州侯の士にて俗称を斎藤十郎兵衛といふよし栄松斎長喜老人の話那り周一作洲」と書かれている。栄松斎長喜は浮世絵師で、「高島屋おひさ」という作品で、おひさが手に持った団扇に写楽絵を描き込んだ人物だ。この達磨屋伍一本の書き込みは、斎藤十郎兵衛説を補強するものである。これまでもそうだが、出てくる史料のほとんどは写楽イコール斎藤十郎兵衛であることを確実にするものばかりなのだ。

国文学者の中野三敏氏の研究から、『諸家人名江戸方角分』には、写楽斎なる人物が八丁堀地蔵橋に住んでいたこと。そして「江戸切絵図」(近吾堂版)によると地蔵橋には斎藤与右衛門という人物が居住していたこと。与右衛門は十郎兵衛が襲名する名であり、交互にこれらの名を名乗る父子関係であったことを調べたのは写楽研究家の内田千鶴子氏であった。

切絵図によると、斎藤家の隣家に村田春海という著名な国学者が住んでいたことが分かる。幕末生まれの国文学者関根正直は自著「随筆からすかご」で、村田春海に関する文章にこんなことを書いている。

「家の垣隣に住める阿州侯(蜂須賀家)の能楽師某の男児を愛し、六七歳の時より家に迎へ、養子として育し立て漢和の学をせさせて家を譲りぬ。之を春路といふ」

こうした研究があり、そして斎藤家の過去帳の発見である。写楽イコール斎藤十郎兵衛が幾重にもつながっていく。

写楽の正体は十郎兵衛が確実に

「すべての道はローマに通ず」という言葉があるが、まさにこれである。出てくる研究成果は斎藤十郎兵衛説を強力にするものでしかない。ギリシャ・コルフ島で発見された写楽の肉筆扇面画の描線に素人っぽさがあるとの見解を、浮世絵研究の第一人者である浅野秀剛氏が示しているのも当てはまる。

これからの写楽研究は、「写楽は斎藤十郎兵衛であった」という前提で始めなければならないと思う。ずいぶん遠回りをしてしまったが、研究すべきことはまだまだ多い。能楽師斎藤家のことや松平定信との関わりにも目を向けるべきだろう。定信は徳島藩お抱えの絵師・渡辺広輝に絵を描かせているし、村田春海とは友人でもあった。春海は版元の蔦屋から本を出版もしているし、門人たちからも手掛かりが得られるかも知れない。

最後にあたって、筆者の思う写楽像が、先述の「随筆からすかご」に垣間見えるので紹介してみよう。ここに「能楽師某」とあるのは、過去帳から斎藤十郎兵衛だと思われる。隣家に養子に出した「春路」のことをこのように記している。

「此の人狷介の性にして、広く人と交らず、誉を当世にもとめざりしかば、相応に学問も出来、歌も上手なりしかど、門人も少く、後の世にをさをさ(なかなか)知られず、養母芳樹存生の時は、家も賑はしかりが、其の没後は次第に淋しくなりて、門前に雀羅を張るべくなりぬ」。

まさに孤高の人・写楽の性格を髣髴とさせるように思うのだが、いかがだろうか。〈了〉

能役者の斎藤十郎兵衛は、阿波人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」で有名な、お鶴の父の十郎兵衛とは違うよ。

写楽再考

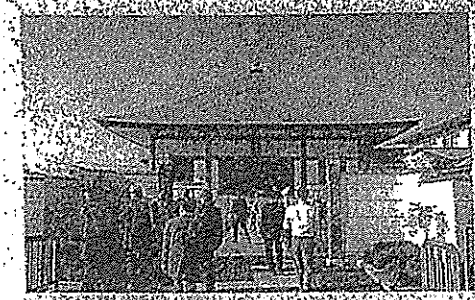
写楽豆知識●ボストン美術館で発見された葛飾北斎の版木の裏には、写楽の相撲絵が彫られていた

埼玉・東京

写楽ゆかりの場所

法光寺

浄土宗本願寺派、日山法光寺は江戸時代に創建され、徳島藩の江戸屋敷にも近い築地に位置していました。1630年代を経て、1993年に埼玉県越谷市に移転されました。北に1997年に写楽の会によって法光寺の過去帳から斎藤十郎兵衛の名が見つかり、増補世俗考にある「谷称斎」は阿波侯の能役者、斎藤十郎兵衛であるとされました。その実在が裏付けられました。境内には立派な写楽の記念碑が建てられて。9月には写楽の会と峰須賀桜も植樹されました。東洲斎写楽を通じて法光寺と徳島の交流が深まっています。



埼玉県越谷市三野宮にある法光寺。地元では写楽ゆかりの寺として親しまれています。

法光寺境内にある写楽の記念碑。1998年建立。

峰須賀桜の植樹式の様子。

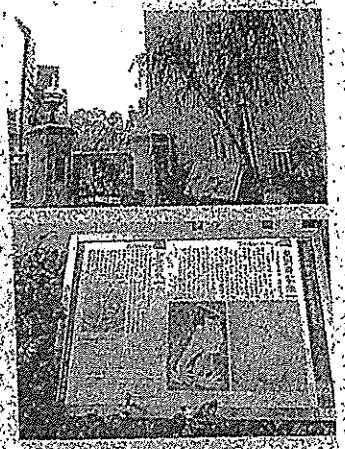
江戸中心部古地図

（ユリウス・クルト『SHARAKU』より）

ユリウス・クルトが描いたこの江戸の地図は、天保3年（1832）のものを基にしています。

亀島橋

東京都中央区八丁堀の八重洲通り、江戸の名残をとどめる亀島川に亀島橋はかかっています。橋のたもとには今、東洲斎写楽と伊能忠敬を紹介する観光パネルが建てられています。



地蔵橋

現在の中央区日本橋茅場町あたりに昔は小さな地蔵橋がかかっていましたが現在はありません。法光寺の過去帳には「八町堀地蔵橋 阿州殿御内 斎藤十郎兵衛事 行年五十八歳 于住にて火葬」と書かれているので、写楽は地蔵橋に住んでいたと思われます。

回向院

墨田区両国にある浄土宗のお寺。江戸時代、回向院の境内では勧進相撲が開かれ生じた、寛政6年（1794）11月に行われた、八歳で体重71キロの力士、大童山の土俵入りは写楽も傑作を描いています。その絵の中に徳島出身で人気力士の鳴見山の姿もあります。

写楽・浮世絵関連年表　（「入門ガイド　写楽」　NPO法人　写楽の会　2019刊　から）

寛延3	1750	蔦屋重三郎誕生
宝暦3	1753	喜多川歌麿誕生
〃10	1760	葛飾北斎誕生
〃12	1762	力士初代勢見山誕生
〃13	1763	斎藤十郎兵衛誕生
明和2	1765	鈴木春信が初めて多色摺版画「錦絵」作成
〃6	1769	歌川豊国誕生
安永元	1772	蔦屋が新吉原大門口に「書肆耕書堂」開店
〃6	1777	勝川春章「役者似顔絵」発表
〃8	1779	北斎が勝川春章の門に入り細判役者絵を発表
天明3	1783	蔦屋が日本橋通油町に耕書堂を出店
		「天明の大飢饉」始まる
〃6	1786	歌麿が大首絵始める
		歌川国貞誕生
		田沼意次罷免
〃7	1787	松平定信が老中に
		「寛政の改革」始まる
寛政元	1789	幕府、華美禁令布告
〃3	1791	蔦屋の出版物が発禁処分に
		蔦屋に身代半減の罰（財産半分没収）
		歌麿「ポペンを吹く娘」など美人大首絵を描く
〃4	1792	「御両国無足以下分限帳」に斎藤十郎兵衛の名が登場
〃5	1793	松平定信失脚
〃6	1794	5月、蔦屋から東洲斎写楽デビュー
		回向院の勧進相撲で大童山土俵入り
〃7	1795	2月、写楽の浮世絵の刊行止む
〃9	1797	蔦屋重三郎没（47歳）
		歌川広重・歌川国芳誕生
〃12	1800	大田南畝『浮世絵類考』
文化3	1806	喜多川歌麿没（54歳）
〃6	1809	力士初代勢見山没
〃7	1810	「猿楽分限帳」に斎藤十郎兵衛の名が登場
文政3	1820	斎藤十郎兵衛没（58歳）
天保2	1831	北斎「神奈川沖浪裏」など『富嶽三十六景』発表
〃5	1844	斎藤月岑『増補浮世絵類考』

写楽に関するうれしいお言葉集

○松木　寛さん（東京都美術館）

（中略）研究者たちによる斎藤月岑説の地道な立証作業は、現在、斎藤十郎兵衛という名の蜂須賀家の能役者が、八丁堀の地蔵橋に実在していた事実をつきとめる段階にまで進展してきている。今後は、十郎兵衛と写楽が同一人であるとの確証を得るところに力が注がれることになる。時間のかかる仕事になるかも知れないが、彼らの努力が実ってくれるのを願いたい。

「蔦屋重三郎」　松木　寛著　日本経済新聞社　S63（1988）刊　過去帳発見前

○田沢裕賀さん（東京国立博物館特任研究員・大分県立美術館館長）

現在では、「浮世絵類考」に記された阿波藩の能役者斎藤十郎兵衛が東洲斎写楽であるとされ、斎藤家の菩提寺である越谷・法光寺の過去帳に「辰三月七日　釈大乗院覚雲居士　八丁堀地蔵橋　阿洲殿御内　斎藤十良兵衛事　行年五十八歳　千住ニテ火葬」と記してあることから、文政三年（1820）五十八歳で没したことが判明し、別人説は沈静化している。

<NHK大河ドラマ　歴史ハンドブック　べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～　蔦屋重三郎とその時代>　NHK出版2025刊